

博士論文の要旨

ギヤスケル文学における母娘関係と女性の生き方 ——女性の持ち場と価値観の変容——

木村正子

本論文は、エリザベス・ギヤスケルの作品における母と娘の関係を軸にして、作品内における女性の持ち場、価値観の変容を読み解くものである。ジェイン・オースティンを先駆者とする女性作家の作品では、未婚のヒロインが失敗を経験しながら精神的に成長し、結婚という〈幸福な結末〉に向かうのが定番の筋書きであった。この類型においては、母はヒロインの成長過程に何も寄与するものがなく、娘は父の教えに従って道徳的に正しい生き方を学ぶというプロットが大半を占める。それゆえ、ヒロインのロマンス・プロットは結婚で終わり、その後の物語が語られることはない。物語の中で、母が無能化され、周縁化されるのもこのためである。しかしギヤスケルは、母を無視／疎外するパターンに否を唱え、母という存在そして母の力が娘の成長に不可欠であるというプロットを提示した。その背景には、女性の人生を男性による支配から解放し、その代わりに、女性の教育を担うのは女性であるというギヤスケルの意識が強く反映されている。この方向転換によって、ギヤスケルが提示するヒロインの物語とは、従来の男性主導による恋愛と結婚の物語とは異なり、母と娘の関係（血縁の親子関係のみならず、女性同士の世代間交流を含む関係）を軸にした物語となっている。

母を前景化することで、母の役割や価値観が他者に有益な効果をもたらすとなれば、女性にとって、ヴィクトリア朝の〈父の娘〉という類型から脱却し、新たに女性による女性の将来設計やロールモデルの構築が可能となる。これは、女性の視点から物事を考え行動する点において、後のフェミニズム運動の布石ともなりえる。さらに、母と娘の間柄を考察することは個々の家庭内における母と娘の関係だけでなく、広義には社会における女性同士の交流（世代間交流による女性の文化遺産の受け渡しや、地域社会での女性の連帯）という問題にも目を向けることにも繋がる。つまり、ギヤスケルが投げかける問題

は、彼女の生きた時代の問題に限定されるものでなく、現代に生きる我々が直面する問題であり、さらに次世代の女性たちが引き継ぐ問題でもある。

このような観点から、本論文では、ギaskellがどのようにして女性の文化遺産をまとまりのある形で残し、次世代に残そうとしたのか、そのためには伝統的な女性の存在、持ち場、価値観等をどのように変容させていったのかという点を論じていくものである。

本論文は4部から成り、各部には2章ずつが割り当てられているが、それに序論と結論を加えた構成となっている。第1章から第8章は作品研究が中心となり、ギaskellの長篇6作品と中篇1作品が執筆の年代順に配置されている。

序論では、ギaskellの作品の位置づけとこれまでの評価を踏まえて、従来の批評が取りこぼしていた点を指摘し、本論文の論点を述べる。20世紀後半までのギaskellと彼女の作品については、「典型的なヴィクトリア朝女性」が書いた「その時代以外には通用しない」ものであり、普遍的な価値はないという評価であった。いわゆるキャンノンによる19世紀の女性作家の作品の評価は、常にジョージ・エリオットの作品が試金石となるが、一番の問題点は、ひとたび評価を受けるとそれが延々と時代を超えて踏襲されていくことである。そのためギaskellの作品の読み直しが行われるまでには、作者の死後100年を要し、また従来の作品評価の基準とは異なり、社会学や文化研究などの分野からのアプローチが必要であった。本研究においても、フェミニズムの視点からの批評に負うところは大きい。しかしフェミニズム批評では、母と娘のいずれかの視点で読む傾向があり、中でも娘の視点を中心にしたものが多いため、ギaskellのように母と娘の双方の視点を持つ場合には、娘から母という存在を理解するだけでなく、娘から母になって立場が逆転した場合どうなるのかという点を看過してはならない。換言すると、母と娘は別個の存在でありながら、同時に一人の女性が人生において経験する2つのステージ／側面である点をとらえることが必要である。

第1部では母の力、特に母性に注目して、母性を活用する上でのメリットとデメリットを二つの作品を用いて考察する。ギaskell作品の出発点は、「慈しみ、育てる」という母性的な視点から、娘の成長に何が寄与するのかを模索する物語であるが、その後ギaskellは、母性的価値観に基づく考えや行動を家庭の育児活動を社会における人間の精神的育成活動へと応用した。

第1章の『メアリ・バートン』では、母を亡くしたヒロインのために複数の代理母が存在するように、保護（者）を失くして暴徒化した労働者たちにも〈母による世話や教え〉が必要であると、ギaskellは訴えている。長引く経済不況で飢餓状態にある労働者たちは、資本主義経済を担う〈父〉＝雇い主から見放されて放置されている。それゆえ子育て

を知らぬ〈父〉にその方法を教え、従来の雇用関係に精神面での変容をもたらそうとするギヤスケルの姿勢には、母による子育ての視点が活かされている。市場原理とは相容れない他者利益の行為を、社会活動として男性の領域にも浸透させる点で、ギヤスケルは母性を有効活用していると言える。

第2章の『ルース』は、淪落の罪を犯したヒロインに対して社会追放ではなく、更生のチャンスを与える物語である。後見人たる大人たちは、ルースの淪落が彼女の精神的未熟さと社会経験の欠如に原因があるとみなし、彼女の内面から母性を引き出して無私の精神で子育てに専念するようにはからう。これはルースの利己主義を利他主義に転換させることが、彼女の救済に繋がるという考えであるが、結果的に男性が女性の母性をコントロールすることを容認することになった。第1章とは対照的に、第2章では、母性は女性の活動源として有効であるが、その一方で母性が女性の自我を否定する側面もあることを訴えている。

第2部では女性の価値観に基づく社会的養育に焦点をあてて、未婚のヒロインが〈父の娘〉から解放され、男性の被保護者の立場から自立する女性へと変容することで、女性に拓かれる活動の場について論じる。二つの作品に共通するのは〈男性による破壊〉と〈女性による癒し〉のコントラストであるが、ギヤスケルは男性文化を全て否定するのではなく、既存のシステムを残しつつ、インフラの整備によって女性が動きやすい社会なりコミュニティのあり方を模索している。

第3章の『クランフォード』は中高年の女性たちが中心となるコミュニティの物語であるが、当の女性たちは過去の男性支配の影に縛られていて自立性を持たない。そのせいもあり、これまで多くの批評家が、この町には子供がいないために未来がないと指摘してきた。しかしそれは、この町の中産階級の男系血筋の存続と継承、換言すれば血統に拘る家父長制の価値観の話である。実子を持たない中産階級の女性たちは、労働者階級との交流や他所からの流入者の受け入れによって、コミュニティによる次世代の育成に従事している。これは混成文化による町の存続であり、家父長制の代替となるべき新しい家族観の提示である。

第4章の『北と南』では複数の文化を横断するヒロインが登場し、混成文化形成の役割を担う。これまでのギヤスケルのヒロインと異なり、マーガレット・ヘイルは自分の意思によって行動し、その活動から自己充足を得る点で画期的である。本拠地を持たないマーガレットは、一見後ろ盾のない無力な存在に見えるが、彼女の強みは単一性や固定化への執着を捨て、社会階級やジェンダーの境界を横断する力にある。さらに後見人からの遺産相続によって経済的自立を得たマーガレットの姿から、強い意志と資金があれば、女性は

男性の領域である社会においても、かなり自由に活動できることを示した。

第3部では女性と言葉との関わりに注目し、男性（あるいは男性社会）がどのようにして女性を沈黙へと導くのか、そして女性は自分の言葉を得ることができるのかという点を論じる。前章で取り上げた『北と南』以降、ギヤスケルは9年もの間長篇小説の執筆から遠ざかっていたが、満を持して発表された『シルヴィアの恋人たち』が提示するのは、既存の社会規範に縛られ追い詰められる女性の姿である。そしてこの作品以降、娘に対する母の影響力が大きければ大きいほど、娘との関係に亀裂が生じ、娘は父と母双方からの自立／解放を考えなくてはならない。

第5章の『シルヴィアの恋人たち』では、国家権力のもとに言葉を奪われる物言わぬ^{サイレント}大衆^{マジョリティ}の構図と、男性支配のもとに沈黙を強要される女性の構図とが相似形として描かれている。支配者の言葉が語るものに対しては、その真偽が検証されないままに事実として受け入れられ記録として残る一方、物言わぬ女性たちの思いは第三者の想像に任され放置される。この作品でのギヤスケルは、悲劇とは英雄の物語ではなく、その背後で沈黙する者の物語であると再定義し、女性の沈黙という悲劇的状况を打開するためには、女性間のコミュニケーション／情報の共有が不可欠であると訴えている。

第6章の中篇「灰色の女」は、『シルヴィアの恋人たち』とは対照的に、ヒロインがペンを武器として言葉を操り、言葉の上ならば自身の人生の書き換え（改竄）も自由であることを示している。ギヤスケルは女性優位の立場を確保するために、ゴシックという当時は廃れたジャンルを利用し、ヴィクトリア朝の〈家庭の天使〉の態度に違反しないように配慮しているが、実生活では沈黙していた女性も、文字化して記録を残せば、その記録が後世の読み手の意識に働きかける力を有することは明らかである。往時の女性作家の作品が今日の読者の目に触れることができるのもそれゆえである。

第4部では、女性が男性の気を惹くために行う自己演出と、女性作家が男性名を名乗り男性のボイスを真似る擬装が相似形であるという仮説を立てて実証する。男性優位の結婚市場においては、女性は男性の視線を制御して自身に有利な状況を作り出さねばならない。これは、これまで沈黙に耐えてきた女性たちの反撃とも言える行為であるが、表裏一体的に弱点も抱えており、他者の存在を意識するがゆえに、女性は自己を捨てて他者の望む姿を演じ続けることになる。その女性の姿や振る舞いは、作品の登場人物だけでなく、男性名を筆名とする女性作家の立場にも通じるものである。

第7章の『妻たちと娘たち』では、ヒロインの義母と義姉妹が〈家庭の天使〉を演じることで得るメリットと被るデメリットを検証し、演技に終始する女性は自己確立ができないという点を論じる。さらに本作品では、母の影響力が大変強く、母は娘を自分の複製で

あるかのように扱う中で、娘はどのようにして自立を遂げるのかというプロセスにも注目する。これまでギヤスケルは、母と娘の疎遠な間柄を解消していく試みをしてきたが、この作品においては、母と娘が向き合っ問題解決に取り組めるのか、母娘間で争いも辞さないほど本音が出せるのかという点にまで切り込んでいる。ギヤスケルの投げかけた問題には明確な解決策は提示されていないものの、彼女は、〈母〉と〈娘〉は個々の分割された役割あるいは二項対立的な関係ではなく、双方とも女性の人生におけるある時期のステージであることを認識しなくてはならないと訴えている。

第8章では、ギヤスケルと後輩作家であるエリオットおよびウルフの作品を比較し、母ギヤスケルから娘たちが何を受け継ぎ、また何を拒否したのかを考察する。前半では、ギヤスケルの「荒野の家」とエリオットの『フロス河の水車場』を比較するが、登場人物や筋書きに共通点を持つ両作品を母と娘の関係から読み解いた時に、母による娘の救済を訴えるギヤスケルと男性による娘の救済に頼るエリオットとの相違が顕著に表れている。

後半はウルフの『灯台へ』における母娘間の葛藤について分析している。フェミニスト作家であるウルフは、女性作家が自立を得るためには〈家庭の天使〉を殺さねばならないと宣言し、彼女の実母を含めた過去の女性たちの文化遺産を切り捨てようとした。しかし『灯台へ』は、ヒロインが代理母の影響から逃れるプロセスを描いたもので、娘の自立には母との葛藤そして争いが避けられないことを実証した。これは、最初から母を無視し、母の力を顧みないエリオットのヒロインとは対照的である。つまりウルフの作品はギヤスケルが提示した母の力抜きでは成立しない、たとえ反面教師であれ、母の存在があつて娘の存在があるという点では、ウルフは確実にギヤスケルの遺産を受け継いでいることがわかる。

以上の論証から、結論では、ギヤスケルが文学史に残した功績として、伝統的に無能化されていた母を前景化し、母の力を有効活用することによって娘の成長に寄与する物語を提示した点を再度強調している。しかし同時に、母の力をどこまで活用できるのかという点に関しては、ギヤスケルにも不十分な点があったことも指摘している。作品を追うごとにギヤスケルの中で、母の視点と娘の視点が衝突するようになり、彼女自身が母でありまた娘であるために、最終的にどちらを選択するのが非常に難しい。結局ギヤスケルは娘の視点を選ぶのだが、それは、娘の人生が未来に向かって開けているからである。すると、母は娘に譲るという従来のパターンを脱することができず、ギヤスケルの作品における母の力には限界があるとわかる。しかしギヤスケルは、母という存在を切り捨てることに決して同意せず、彼女は女性の物語や歴史において、過去・現在・未来の連続を意識した物語を紡いだ。ギヤスケルは、娘が男性の介入なしに自身の人生設計ができるように成

長させる狙いを潜ませ、それが母と娘のつながりを断ち切らせない、換言すると、女性の物語の断片化を避ける方法であったのである。母と娘の関係に関する問題は現代社会においても未解決のものが多い。それゆえ文学の系譜においてギヤスケルが過去の作家や作品から受け継いだものと次世代に受け渡したものを分析し精査することは、回顧にとどまらず、我々の現在・未来の人生設計を再構築する上で非常に有益なものであると言える。